

# マインドマップを活用したナラティブ・ペダゴジーの 実践とその宗教教育学的価値

徐 有珍

(東京基督教大学大学院神学研究科博士後期課程)

## 第1章 研究の出発点と目的

宗教教育の歴史の中で多くのキリスト教教育者は、対立する二つの目的の間で葛藤を覚えてきた。それは、連続性 (continuity) と変化 (change)、または伝統 (tradition) と改革 (reformation) といった言葉で語られるものであり、それらの言葉の裏側には、研究・教育者によって蓄積されてきた教理と、学習者が現実社会で直面するさまざまな課題をどう調和させるかというせめぎ合いが存在する。21世紀を代表する福音的な北米のキリスト教教育学者であるロバート・パズミーニョ (Robert W. Pazmiño) は、キリスト教教育の目的について次のように語っている。「過去数世紀にわたるキリスト教教育の歴史において、信仰と教育の基盤となる聖書の中心的な真理が強調される際には、キリスト教の連続性 (continuity) が重視され、他方、神学的真理を具体的な歴史・文化・社会に関連付け、適用させる際には、変化 (change) の必要性が意識されてきた」<sup>1</sup>。しかしこのようなキリスト教教育における「目的の対立」(異なる方向性をもつという意味における対立) は、近代以降、数世紀にわたる多くの宗教教育者の考察と議論にもかかわらず、未だにその距離を縮められず、平行線をたどっていると言えるのではないだろうか。そのためか、既存の宗教教育の方法論 (以下ペダゴジーと呼ぶ) の見直しが、20世紀終盤以降、盛んに主張されるようになってきている。この「目的の対立」という課題を解決に導く教育方法論が模索されるなか、北米を中心に近年注目されるようになっていくペダゴジーが、「ナラティブ・メソッド」である。

---

1 ロバート・パズミーニョ著、パク・ギョンスン訳『福音主義的観点からのキリスト教教育入門書—キリスト教教育の基礎』韓国語訳、ソウル：図書出版ディモデ、2003年、7頁 (原書 Robert W. Pazmiño, *Foundational Issues in Christian Education: An Introduction in Evangelical Perspective* 2nd ed. Grand Rapids: Baker Academic, 1997.)

ナラティブ（物語）を用いたペダゴジーは、洋の東西を問わず太古の昔から存在し、宗教教育における最も重要かつ代表的な方法論のひとつでもある。近年のキリスト教神学の流れの中では、ナラティブ・テキストとしての聖典（聖書）が強調される一方、キリスト教教育の中で用いられるべきナラティブの範疇が、信仰者コミュニティのナラティブ（community story）や、信仰者の個人的なナラティブ（life story）へと広げられている<sup>2</sup>。ナラティブ・メソッドの研究者であり、若者の信仰形成やペダゴジーの専門家であるフランク・ロジャース（Frank Rogers Jr.）は、教育者は、一方向的にナラティブを語るオーソドックスな用法だけで満足するべきではないと語る。ナラティブ・メソッドの真価は、個々のイマジネーションに感化された芸術的とも言えるナラティブを用いた教育の取り組みの中で発揮され、それは特に若者の宗教心の喚起、信仰心の成長、倫理観の醸成、といったポジティブなメリットをもたらすペダゴジーになりうると指摘する<sup>3</sup>。

このナラティブ・メソッドに大きな影響を与えた人物のひとりである南米の教育学者パウロ・フレイレ（Paulo Reglus Neves Freire, 1912-97）は、伝統的なコンテンツ教育（貯蓄型教育）の限界やトップダウン式の受け身型教育の危険性を指摘する一方で、他者との「対話」の重要性を強調する。そして学習者が互いのナラティブを通して過去と現在を分かち合い、それらに共感することによって新しい知識が生まれると主張する<sup>4</sup>。北米を代表する宗教教育学者のトーマス・グルームもまた、信仰共同体の「物語」の重要性を強調しつつ、ナラティブの分かち合いは、独白（モノローグ）的方法より対話的方法をとるべきであると語る。そこでは共同体の構成員がそれぞれ自分のナラティブとビジョンを語りながら、他者に対して相互的に省察したり、質問したりといった開放的なペダゴジーが重要であるという<sup>5</sup>。このような主張は、とりわけ世代間、地域間コミュニケーションの断絶といった問題

---

2 岡村直樹「ユースの宗教性・倫理性の発達につながるナラティブ・メソッドとその実践」（『キリスト教教育論集』第21号、日本キリスト教教育学会、2013年、1頁）

3 Frank Rogers Jr., *Finding God in the Graffiti: Empowering Teenagers Through Stories* (Cleveland: The Pilgrim Press, 2011), 132-34.

4 パウロ・フレイレ著、ナム・ギョンテ訳『ペダゴジー』韓国語訳、ソウル：グリーンビ出版社、2002年、96-98頁。（原書 Paulo Freire, *Pedagogy of the Oppressed*, New York: Continuum International Publishing Group, 20th Rev. ed. 1993.）

5 トーマス・グルーム著、イ・ギムン訳『キリスト教的宗教教育』韓国語訳、ソウル：韓国長老教出版社、1983年、311頁。（Thomas H. Groome, *Christian Religious Education: Sharing Our Story and Vision*. San Francisco: Harper & Collins, 1980.）

を抱えたより複雑化する現代社会において、ナラティブ・メソッドが宗教教育の現場における注目されるべきペダゴジーであることを物語っている。

本稿は、ナラティブ・メソッドを用い、学習共同体のナラティブを引き出すことと、そのナラティブを語り合うための教育方法について考察しつつ、学びの連続性 (continuity) と変化 (change)、伝統 (tradition) と改革 (reformation) の間に調和をもたらす学習のあり方を模索するものである。具体的には、ナラティブ・ペダゴジーを用いた学校宗教教育の現場において、マインドマップという (次章で説明される) 思考法を導入し、学習者がもっている宗教概念に対する理解を観察し、その変化を分析しつつ、宗教教育における「目的の対立」を和解へと導く実践的な提言を行うことを目的とする。

## 第2章 教育・研究方法

### (1) マインドマップについて

本稿において用いられる「マインドマップ」とは、イギリスの教育専門家であるトニー・ブザンが提唱した思考ツールで、それを用いる者の思考の整理や創意力の発達を促す効果をもつとされている。彼によれば、人間の脳は放射思考をするため、一つの中心概念から発想を増やしていくことを通して得た情報を記憶し、整理するという。放射思考とは、中心点から外側に向けて広がっていく連想的な思考過程を意味する。また「放射」という言葉は「中心からあらゆる方向に広がったり移動したりする」ことを意味する<sup>6</sup>。すなわち、マインドマップは、中心となる概念から連想されるキーワードやイメージを放射状に広げ、一つの中心概念に結合されるすべてのキーワードやイメージから、新たな連想を起こしていくというプロセスを踏みつつ、連想された言葉に対しても、さらにそこから連想を広げていくのである。マインドマップは学習者に興味をもたらし、日常生活の中でも比較的簡単に用いることができるため、ビジネスのプレゼンテーションや多様な会議等で広く用いられ、日本においてもマインドマップを応用した学習に関するさまざまな研究が行われている。マインドマップが学習効果を高める要因を検証した高橋文徳の研究によると、マインドマップには、「物事をまとめること」「考えを明確にすること」「物事的全

6 トニー・ブザン、ベリー・ブザン著、グォン・ボンジュン訳『トニー・ブザンのマインドマップブック』韓国語訳、ソウル:ビジネスマップ、2010年、72頁。(原書 Tony Buzan. and Barry Buzan, The Mind Map Book (Illustrated) Upgrade 01 Edition. London: BBC Worldwide, 2006.)

体像を把握すること」「物事の細部を把握すること」「時間を有効に使うこと」「効率的に作業をすること」といった教育的効果が確認されるという<sup>7</sup>。本稿において中心的に用いられているペダゴジーであるナラティブ・メソッドの活用と、上記のような効果をもつマインドマップの方法を併用させることによって生まれる教育的相乗効果の検証も、本稿の目標の一部である。また宗教教育におけるナラティブ・メソッドとマインドマップの併用に関する日本での実践研究例はこれまでのところ存在していない。

## (2) 研究データの収集について

本稿のデータ収集は、2015年5月から6月にかけての約1ヶ月間、千葉県印西市に位置する東京基督教大学（略称 TCU）において、新入生を対象に毎春開講されている「キリスト教世界観a」クラスの一部を通して実施された。「キリスト教世界観a」クラスは学部新入生に、基本的なキリスト教の世界観についてさまざまな角度から考える機会を提供するクラスであり、5人の教員によるティーム・ティーチングで教えられている<sup>8</sup>。全10回の授業のうち、連続する4回の授業を筆者が担当し、課題の内容や受講生（以下学生と呼ぶ）のリフレクション等が観察された。全28名の学生は、ランダムに5つのグループに分けられ、4回の授業終了まで同じメンバーでのグループワークが行われた。

1回目の授業では、研究対象者である学生に、「献身」というテーマに関するマインドマップを作成し、発表する課題が投げかけられた<sup>9</sup>。教員からマインドマップの意味と作成方法を説明された学生は、まず個々でマインドマップを作成した。そ

---

7 高橋文徳「マインドマップが学習効果を高める要因の検証」（『尚絅学園研究紀要』自然科学編第6号、2012年、16-17頁）

8 「キリスト教世界観」クラスの主任教員である岩田三枝子講師は、このクラスのエデュケーション目標を以下のように説明する。「キリスト教世界観は、私たちがキリスト者として、どのような視点で日常生活に臨むべきかを考える枠組みです。TCUでの生活のみならず、今後生涯をキリスト者として歩むうえで、キリスト教世界観は重要な意味を持ちます。授業を通して、まずはキリスト教世界観の入口に立ち、すべてのことを通してキリスト者として生きる生き方を共に考えていきましょう」（東京基督教大学ウェブシラバス <http://syllabus.tci.ac.jp/tb4.php?kam=U>）

9 献身は、東京基督教大学の理念として次のように表明されている。「キリストへの献身：神が与えておられる個々の学生の能力と賜物を引き出し、「キリストに仕える」という志を確固とし、全人格の陶冶を通して奉仕の態度を身につける。個々の学生が生きる意味と使命を見出し、具体的な奉仕につくために支援する」（東京基督教大学ホームページ <http://www.tci.ac.jp/info/statement#mission>）

の後、グループで集まり、グループのマインドマップの作成に着手した。2回目の授業では、グループで作成したマインドマップをクラスメイトの前で紹介・説明し、クラス全員による質疑応答の時間をもった。3回目の授業では、それぞれのマインドマップに基づいて作成された「献身」に関するオリジナルのスキットをグループごとに披露し、その後、個人とグループによるリフレクションの機会をもった。4回目（最終回）の授業では、クリスチャンのユースキャンプ（中高生を対象にし、教会や教団が主催するキャンプ）で「献身」に関する講演を依頼されたという設定で、各グループがユースを対象に「献身」について自由な形式で教える「ティーチング」課題が発表された。その後、個人やグループによるリフレクションの機会をもち、最後に教員からの総括が行われた。

今回の授業で、スキットとティーチングを用いた理由は、2つの異なるナラティブのプレゼンテーションを学生が体験できること、また限られた時間内で、グループメンバー全員の積極的参加が促されることの2点で、どちらも本稿の目的に適していると考えたからである<sup>10</sup>。

また本稿では「献身」という言葉を研究のトピックとして選択した。「献身」という言葉は、デジタル大辞泉によれば「1. 他人やある物事のために、わが身を犠牲にして尽くすこと」「2. キリスト教で、神のために、生涯をささげること」とされている<sup>11</sup>。一方、宗教学的観点から宗教的回心論を展開したアメリカの心理学者ルイス・R・ランボー（Lewis Ray Rambo）は、彼の著書の中で「献身は、意思決定、儀礼、放下、言語の変容と個人史の再構築の中で表明された証言、そして、動機の再定式化という五つの段階を持つ」と、その概念の複雑性を説明している<sup>12</sup>。実際には、非常に複雑で多様な概念を示すこの言葉は、今回の研究の舞台となった東京基督教大学の理念や、学部のアドミッション・ポリシー（入学者受け入れ方針）の中にも言及され、大学内で重要な意味をもつ言葉として、多くの学生によって頻繁に用いられているものである。この言葉を研究の題材として選択した理由は、多様性をもつこの「献身」という言葉が、学生のもつ宗教概念理解の変化を検証するうえで、研究に適していると考えたからである。

10 徐有珍「学ぶ者の自主性を強調する、ナラティブ・メソッドを用いた宗教教育の実践と検証ー知識と経験の調和を求めて」（『キリストと世界』第25号、東京基督教大学、2015年、144頁）

11 出典：小学館 デジタル大辞泉 <https://kotobank.jp/word/献身-492384>

12 ルイス・R・ランボー、渡辺学・高橋原・堀雅彦訳『宗教的回心の研究』ビーイング・ネット・プレス、2014年、156頁

### (3) 研究分析の方法論：グラウンデッド・セオリーについて

本稿は、ブザンの提唱するマインドマップの技法を、ナラティブ・メソッドという宗教教育の方法論と並行する形で用い、その効果を教育実践の中で検証するものである。本稿の研究データは、教育現場（実際のクラスワーク）から、課題発表、個人リフレクション、グループリフレクション等を通して直接収集したものであり、質的研究の第一人者であるマイケル・クイン・パットンの著書、*Qualitative Research and Evaluation Methods* に記述されたグラウンデッド・セオリーのガイドラインに沿って分析したものである<sup>13</sup>。グラウンデッド・セオリーは、質的研究の方法論であり、対象者を広く浅く学ぶのではなく、狭く深く学ぶことから、研究対象者や対象とするさまざまな現象をどれだけ深く掘り下げることができるかを重要視するものである。また質的研究は、本稿が取り扱う課題のように、量的に表すことの難しい宗教心、信仰心、感情、心の動き、対人関係といった分野において、特に有効であると考えられる<sup>14</sup>。

グラウンデッド・セオリーはデータ収集、データ分析、立論という3つの主な段階から構築されている<sup>15</sup>。本稿のように研究対象者の個々のリフレクションや、グループリフレクションの内容に着目してデータ収集をする場合、研究者は自らの予見に頼らず、研究対象者ができる限り自由に語る（または書く）ことができるよう心がけつつ、質問の内容や、話の導き方をオープンに保つことが重要とされる。収集したデータの分析では、さまざまなカテゴリー（まとめり、または概念）を生成し、それらを組織化していくこと、言い換えれば、収集したデータを一端バラバラにし、新しく組み替えて再構築する作業が必要となる<sup>16</sup>。本稿では、クラスプレゼンテーション、個人リフレクション、グループリフレクション等の結果を、上記のようなプロセスを踏んで収集・分析した。収集したデータの内容は第3章で、分析の内容は第4章で、また立論は最終章において紹介される。

---

13 Michel Quinn Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods* (Thousand Oaks: Sage Publications, 2002)

14 岡村直樹「キリスト教大学における震災ボランティア活動と宗教心の発達—ミッション系学校におけるサービスマーケティングの観点から」（『キリストと世界』第23号、東京基督教大学、2013年、27頁）

15 Anselm Strauss and Juliet Corbin, *Basics of Qualitative Research* (Thousand Oaks: Sage Publications, 1998), 12.

16 木下康仁『ライブ講義 M-GTA —実践的質的研究法』弘文堂、2007年、209-216頁

### 第3章 収集データのまとめ

前章に述べたように、本稿では「キリスト教世界観a」のクラスにおいて分析に必要なデータの収集を行った。本章ではまず、グループごとに作成された実際のマインドマップを紹介し、スキットとティーチングの結果をグループ①～⑤別に短く紹介・説明する。

#### (1) グループ発表の結果

〈グループ①〉

マインドマップの結果

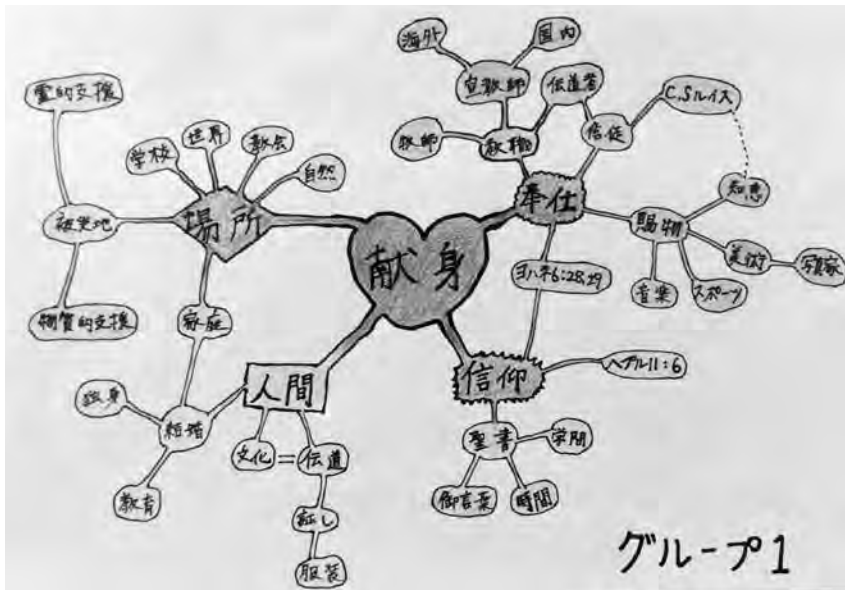


図1 グループ①のマインドマップ

#### スキットのあらすじ

写真の才能がある女子高生のAは、全国高校生写真コンテストでグランプリを受賞する。授賞式に参加するため、主日礼拝に出席できなかったAは、説教を聞けなかったことに心が落ち込んでいた。ある日、有名写真家であるマイケルがAの家に訪ねてきて、一緒に働くことを提案する。そのことを聞いたAの両親は喜

んでくれるが、Aは「実は私は献身がしたい」と言う。その言葉に対してAの両親は、写真の才能も神様から与えられた賜物であり、献身とは「与えられた時間や才能を神のために使うこと」と答える。最後にメンバーの全員が前に出て、「ここに私がいます」という賛美を歌う。

### ティーチングの内容

発表形式は、スキットとグループ・ディスカッションを用いた講演。日常の中で献身する人生の生き方とは何かを、多様なテーマに関するスキットと講師（学生）のメッセージを通して聴衆と共に考える。具体的にはクリスチャンの男女交際、美容整形や飲酒問題と献身との関連性に関する短いスキットを演じた後、会場の学生たちとディスカッションを通して意見を語り合う機会をもつ。最後に聖書（ローマ12：1）から献身の意味を振り返り、信仰をもって献身する人生を送ることに關するメッセージが語られる。

### 〈グループ②〉

### マインドマップの結果

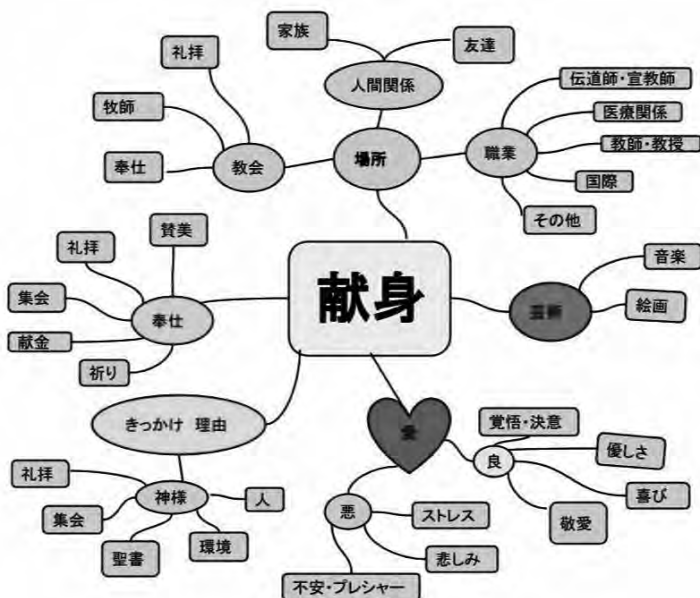


図2 グループ②のマインドマップ



### スキットのあらすじ

クリスチャンホームで育ったK、牧師家庭で育ったT、片親だけクリスチャンであるM、ノンクリスチャンホームで育ったNは、互いに異なる環境で育ったが仲の良い友達。4人は同じ教会に行っている。ある日曜日、礼拝後にT、K、Mの3人が「幼い頃から親に連れられて通ってはいるが、教会では友達に会えるし、食事が美味しいから来ているだけ」と話していることを聞いて、Nは恵まれた環境への感謝を知らない彼らを非難する。3年後、それぞれ進路が決まったなか、Nだけが受験に失敗していた。教会にも来なくなったNを心配した3人の友は、Nが立ち直れるように説得し、その友情に感動したNは教会に戻ることになる。その日曜日、教会に集まった4人は、それぞれの道から献身することを決心する。

### ティーチングの内容

発表形式は、メッセージ中心の講演。キャンプに招かれた講師が、アニメーション「アンパンマン」の「なんのために生まれて、なにをして生きるのか」という主題歌の歌詞を、聖書に照らして考える時間をもつ。アンパンマンのように困った人を助けることも素晴らしいが、信仰者としての献身は、人生の中でイエスのように自分の十字架を背負って、神の栄光を現すことであるというメッセージが語られる。

〈グループ③〉

マインドマップの結果

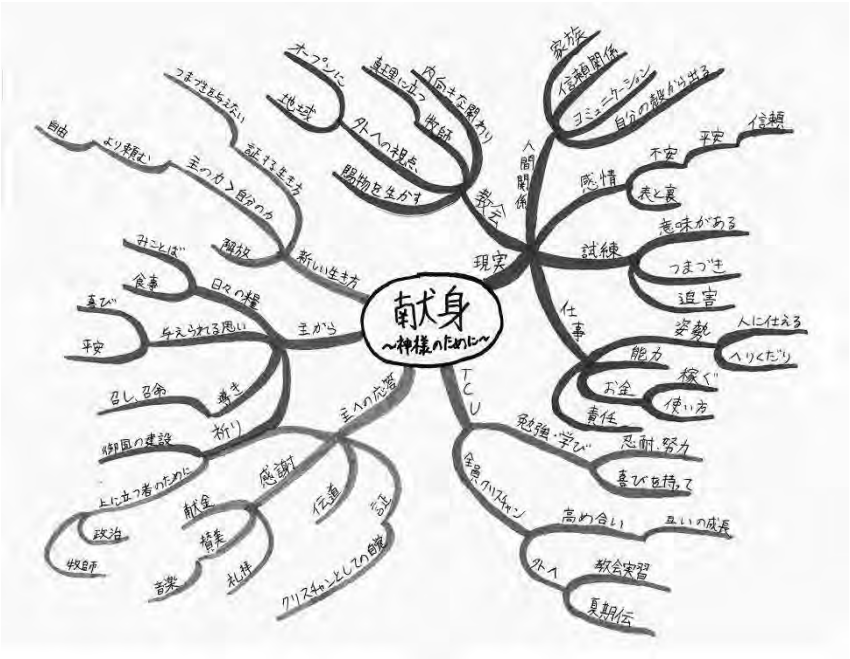


図3 グループ③のマインドマップ

スキットのあらすじ

受験勉強に励む高校3年生のOは、信仰深いカトリックの信徒である。父親の期待にそって薬学部への進学を目指す、自分の中にはまだ進路について迷いがある。ある日、Oは聖書を読むなかで、きちんと神学を学びたいと思うことになる。そのことを両親に伝えるが、宗教嫌いの父親の激しい反対にぶつかり、Oはそのまま家を出て修道院に向かう。その後、プロテスタント教会の牧師である伯父さんから連絡があり、Oは伯父さんとの議論を交わすなかで、教理的なことより、もっと聖書そのものが知りたいと思うようになる。神学大学に進学することを決めたOは、TCUの受験に合格し、その後、父親からも理解されるようになって、大学に入学して献身の道を歩むことになる。

ティーチングの内容

発表形式は、ショートムービーを用いた講演。Kは東大を目指している女子高生。礼拝の時には単語帳を読むほど受験のことでプレッシャーを感じている。ボクシング部のTは、コーチに日曜日にも練習に参加するようにと言われる。Rは、忙しい受験勉強のなかでも毎日、早天祈祷会に行く熱心なクリスチャンだが、最近友達と上手くいかなかった。3人は聖書の言葉を通して、偏っていた自分の信仰状態に気づき、信仰と日常生活とのバランスを取ることを決心する。ビデオ上映後「献身」とは人生の中で色々な形と方法で実現できるものであるというメッセージが語られる。

#### 〈グループ④〉

##### マインドマップの結果

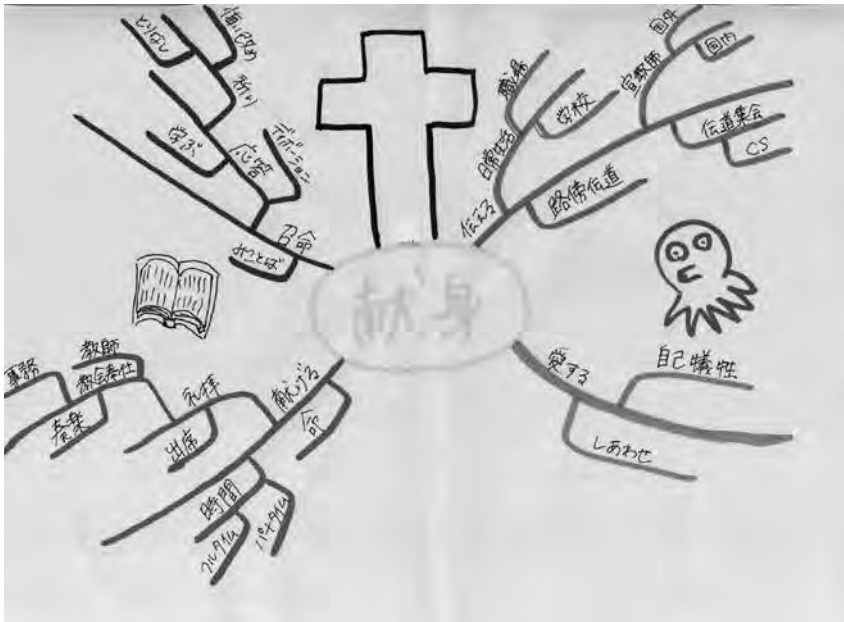


図4 グループ④のマインドマップ

##### スキットのあらすじ

毎週日曜日、教会学校の教師として奉仕を頑張っているH。しかし、会社ではなかなか営業の成果を出せず、上司に叱られる日々が続いている。最初は喜びをもっ

て子供たちに聖書を教えていたが、仕事と教会の奉仕を両立することに、Hは徐々に限界を感じるようになっていった。ある日、教会の牧師から水曜礼拝の奏楽を頼まれたHは、自分の力不足に挫折し、牧師に「献身とは何ですか」と問う。それに対して牧師は、「献身とは、何をやっても神様を見上げながら生活すること」と答え、牧師の言葉から力を得たHは心を新たにし、これからも神様を見上げて歩んでいくことを決心する。

### ティーチングの内容

発表形式は、ショートムービーを用いた講演。餃子屋の店員Mは、店長から日曜日に試食会をすることを頼まれる。対応例として「対応1」と「対応2」の2つの場面が紹介される。対応1の場合、日曜日の試食会を断れずMは教会を欠席して料理を作るが、その料理は店長から低い評価をもらうことになる。一方、対応2の場面では、Mは日曜日の試食会を教会に行くために断り、店長はそれを理解して試食会を別の日にすることになる。次に同じように、毎日の家事に疲れた主婦Hの「対応1」と「対応2」が紹介された。対応1では寝る前のデボーションを休むことが、対応2では疲れていてもしっかりと聖書を読んで休むことが描かれる。さらに、飲み会に誘われた女子大生Aの場合、対応1の場合、飲み会で遊んで主日礼拝で居眠りをする姿が、対応2の場面では、飲み会を断って主日礼拝でしっかり説教を聞く姿が描かれる。ビデオ上映後、講師によって日常での献身の姿勢について簡単なメッセージが語られる。

〈グループ⑤〉

## マインドマップの結果

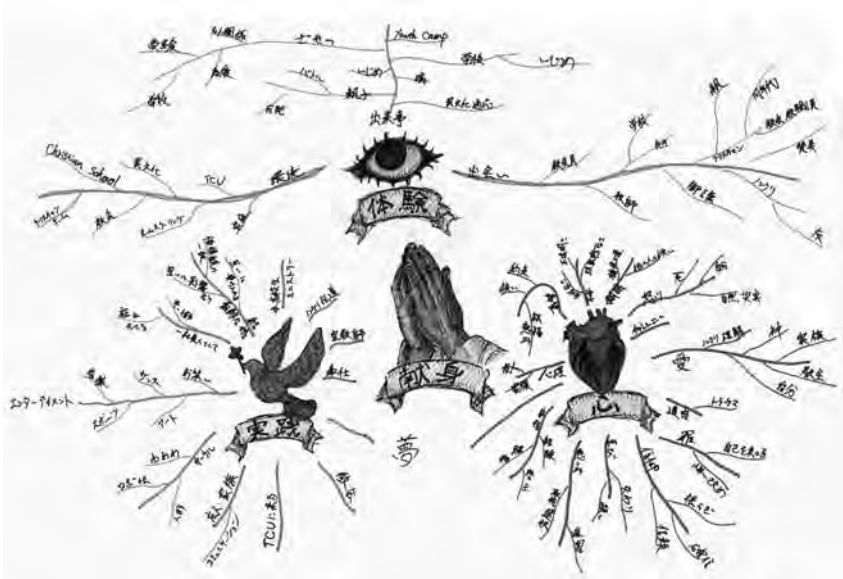


図5 グループ⑤のマインドマップ

## スキットのあらすじ

同じ大学に通っている L と M。2 人は大学に入学する前の話をしている。看護学校に行きたかった L は、母との話のなかで神学大学に行って神学を学ぶことを勧められる。進路のことで祈り続けていた L は、母の言葉通りにまず神学を学ぶことを決心する。一方、M は理学療法士になることを目指してアメリカに行く。しかしそこで献身の思いが与えられた M は、牧師になることを決意して日本に戻ってくる。友達と進路のことで色々話を交わすなか、M は友達から今の大学を勧められる。こうして同じ大学で神学を学ぶことになった L と M。その後、看護師になって活躍する L とクリスチャンの成長のために働く牧師になった M の未来の姿が描かれる。

## ティーチングの内容

発表形式は、トーク番組。視聴者のリクエストにより、ユースミニストーリーに関する3本のビデオが上映される。1つ目のビデオには、ユースキャンプで自ら献身

の道を決心する高校生が登場する。2つ目のビデオでは、牧師と献身について自由に意見を交わした後、献身することを決める高校生の姿が、最後のビデオでは、賛美集会での賛美を通して、献身していくことを決心する高校生の姿が描かれる。3本のビデオによる献身に至るさまざまな例を通して、共に献身について考える機会をもつ。

## (2) 個人リフレクションペーパーの結果

本稿では課題の他に、課題に対する個人、およびグループごとのリフレクションをデータとして収集した。リフレクションは、スキットやティーチングの発表の後に質問用紙を配布し、そこにある質問に回答するという形で行った。まず一人ひとり個別のリフレクションの時間（約10分）をもち、その後グループによるリフレクションの時間（約15分）をもった。2つのリフレクションを行ったのは、まず個々の意見をまとめてからグループリフレクションに取りかかってもらうためである。個人リフレクションの結果は、内容別にまとめつつ抜粋し、グループで分けることなく以下に列挙する。グループによるリフレクションの結果は、グループごとに一人の書記を決め、その学生がディスカッションを書き取る形でまとめられた。グループによるリフレクションの結果は、4章以降で紹介する。

スキット後の個人リフレクション

質問1)「物語を作る」という課題について当初どう思いましたか？

「献身という今まで深く考えたことのないテーマをもって物語を作るのは、簡単ではないなと思った」

「どのように伝えればいいのか、まず、献身って何だ？と思った。でも、楽しそう」「どんな雰囲気の物語にするか、どういうメッセージを盛り込むかを悩むのはとても楽しいと思う」

「実体験に基づいて作ればいいので、あまり難しいものとして受け取らなかった」「教会やキャンプなどでスキット作りはよくしていたため、純粋に楽しめそうだなと思った」

「メンバーのことをよく知っているわけではないので、とても不安だった」

「それぞれ意見があるので、まとめるのも難しそうと思った」

「これで色んな人（まだ話した事のない人）と話す機会を持てることは嬉しく思う」「きちんと構成して、1から話を作るのが大変そうだった」

「どのような内容にしたら良いのか分からなかった」

「自分達だけで作れるのかという不安があった」

「わりと似たようなものができてしまうのではないかと思った」

質問2) マインドマップ作成に関する感想は？ また、何か発見がありましたか？

「頭の中だけで考えるより、とにかく書いてアウトプットした方が沢山のアイデアが湧いてくる」

「頭の中が整理されて、少しずつ明確になっていった」

「図にすることで、つながりが見えてきて面白いと思った」

「自分が考えていた献身というものが、狭く、抽象的であることに気付いた」

「献身の意味の多様性がリアルに出てきて、その世界が広がり、明瞭になった」

「様々な技、献身のあり方があることを再確認し、その素晴らしさと美しさを感じることができた」

「今までの献身観は、フルタイムの献身主体だったが、生活の中の献身もあるんだなと気付かされた」

「献身とは、牧師や宣教師になることだけではないということを改めて確認できた」

「献身の方法は一つではなく、それぞれ与えられたものをいろいろな形で神様に返すということが分かった」

「マインドマップを通して、クリスチャンのいない社会の場での伝道がいかに大切か気付き、献身とはコミュニケーションではないかと思った」

「自分は何をして仕えていったら良いのだろうと悩んでいたけれど、答えを導き出す時間となった」

質問3) グループで作ったスキットを準備する中で、何を感じ、何を思いましたか？

「お互いに献身とは何かということを明確に持っていなくて、グループとして探し、答えを出せたのがよかった」

「献身のイメージがどんどん変わっていき、最後にまとめ上げるプロセスが楽しかった」

「メンバー一人一人の知らなかった部分が見えて、色んな面で学ぶことができた」

「自分と全然違う環境で献身をした人、自分とは違う感覚や捉え方の人もいて、それを理解するのが難しかった」

「みんな日に日に変えられていくのが見えてそれもそれで楽しかった」

「みんなの意見を出し合ってストーリーを作ることができて、何より楽しくできたことがよかった」

「メンバーの証しを聞くことができて、それぞれ色々な形のクリスチャンとしての道があることに気付けた」

「台本を作るのが思ったより大変だったが、みんなで話し合って作るのは楽しかった」

「仕える方法の一つだけではないが、目的は一つということを今回一番強く感じた」

「演技をすることで、普段自分達はいつもどうやって感情表現をしているのかを、意識するきっかけになって興味深かった」

#### ティーチング後の個人リフレクション

質問 1) 今回のグループ発表を準備する中で、何を感じ、何を思いましたか？

「聞く人の立場に立って考えることの難しさを改めて感じた」

「中高生に献身を伝える方法は何かを考えるのが、本当に難しかった」

「ユース対象だと、言葉を選んでやらないといけなかったので大変だった」

「人を理解すること、異文化理解は必要だなと感じた」

「前回と少し異なるアプローチを試みたので、それを考えるのが楽しかった」

「いつも説教で聞く長い話にはしたくなかった」

「面白くティーチングをしようと頑張ったので、本番がつまらなくならないように注意した」

「献身というテーマを中心に、物語がテーマから逸れないようにした」

「自分の中で献身というものがどういうものなのかははっきりしていないとそれを教えることは難しい」

「献身とは自己満足ではない。神だけでなく、人にも仕えることが大切」

「何が御心なのか悩む自体を、神様は喜んでくださるんじゃないかなと思った」

「何をするか話し合いの中で決めたので、やはり一人一人の意見が大事であると感じた」

「時間はけっこう取られたけど、チームの人と仲良くなれてよかった」

「グループワークの難しさを感じた。誰がリードするのか責任の所在が曖昧になる」

質問 2) 前回の発表と比べて（今回は）どのような発見、変化がありましたか。

「枠を決めすぎないこと。献身とは何かから一歩進んだ献身者としての生き方を行う内容になった」

「伝えたいことが、前回よりまとまった感じがした」

「伝えたいこと、ポイントがしっかりと意識できた」



「話をだらだらと話す場面が少なくなった」

「献身についてそれぞれの考えがはっきりしてきた」

「献身の意味『何をするにも、ただ栄光を現すためにしなさい（I コリント 10：31）』が再確認できた」

「献身としての正しいあり方に着目していたので、前回とは違う方面から献身について考えられた」

「どのグループも献身とはどういうものなのか、グループごとに明確になっていった気がする」

「だんだんグループの絆が深まってきた」

「時間がたっぷりあったからか、皆の成長が分かりやすく面白く思えた」

「前回より負担がまんべんなく同じくらいになったと思う」

「ビデオにすることで、表現の幅が広がった」

「構成的に前回よりもエンターテインメント性の強いものとなった」

「前は決められた方法でやればよかったが、今回は一から自分達で決めなくてはならないことに苦労した」

「いつもメッセージを準備している方々が、どれほど苦労しているか知った」

質問3) 今までの4回の授業を通して、何を感じ、何を思いましたか。

「今まで献身についてこんなに深く考えたことがなかったので、皆の発表を聞いて色んな献身の仕方があるということに驚いた。実際に献身とは何かと聞かれたら今まで学んだことをしっかり伝えたい」

「献身とは？という問いを、常時、問われていると思った」

「献身を違う角度から考えることができた」

「献身ってすごく身近で、生活、人生そのものだと思った」

「献身について再確認するととてもよい機会だった。毎回楽しめる、考えさせられる授業だった」

「献身という言葉を当たり前のように使っていたが、深く意味を考えさせられた」

「漠然としていた献身や自分の生き方が明確になった」

「自分が献身者であるということを再確認させられた。献身という言葉の重み、広さを学べた」

「献身というのは神を中心に歩むということ、それを実践することという二つのことを学ばされた」

「何のために生きているのか、たまに分からなくなる時があったが、アンパンマン

の比喻を通して献身を見つめ直す時となった」

「教職だけ、教会だけ、じゃない。牧師でも献身しないことができてしまう」

「神様について、クリスチアンの生活について考えるよい機会になったと思う」

「キリスト教世界観を持つうえでの献身の思いを学んでいると感じた」

「I コリント 10：31 の意味がより深く分かった気がする」

「マインドマップで献身から色々言葉をのぼして、生活全体をカバーした感じが面白かった」

「自分が考えてもなかったようなことが、献身につながっていたことを発見した」

「自分達で作り上げるというのは、大変で難しいのと同時に、『自由』だということ。それは自分達独自の見せ方、表現を通して自らを『証』するようなものであること」

「独りよがりな考え方をしていたんだと思わされた」

「ただ座って授業を聞くよりも自分で、自分達で考えるので、深く考えられた」

「一人で考える方が楽な面もあるけど、グループだとさらに幅が広がる」

「献身について自分のグループで考える時も、他のグループの発表を見た時も改めて考えさせられた」

「みんな真剣に考えていることを感じてとても良かった」

「それぞれの世界観が個性的に出ていると感じた」

質問 4) あなたが思う「献身」を一言で定義付けてください。

「キリスト者が自分のすべてを神に受け入れられる心からの生き方、供え物として捧げること」

「献身とは主への返しもの」

「生活のすべてを神様に捧げること」

「自分の時間を神様に捧げること」

「自分自身を神様に捧げていくこと」

「何事にも愛をもって、神様の栄光を現す」

「神様の栄光を現すために、自分の賜物を活かし、神と人に仕える」

「神様を見上げて生きる」

「常に心を神様に向けること」

「神様を認め、共に歩むこと」

「自分に出来ることを、その場所で行うこと」

「自分の望まない事や納得できない事であっても、神様に行けと言われるなら行くこと」

「神からの召しに応えること」  
 「神を愛し、隣人を愛する」  
 「何のために生まれて、何のために生きるのか」

## 第4章 データ分析

2章でも言及したが、本稿において収集された3章のデータは、マイケル・クイン・バットンの著書、*Qualitative Research and Evaluation Methods*に記述されたグラウンデッド・セオリーのガイドラインに沿って分析を行った。限られた誌面の関係上、すべてのプロセスを記述することはできないが、クラスプレゼンテーション、個人リフレクション、グループリフレクション等の結果は、キーワード等を用いてカテゴリー化して分析し、さらにデータを理解するうえで必要があると思われる場合は、その内容を図表化した。本章では、(1) マインドマップとスキット、(2) スキットとグループリフレクション、(3) ティーチングとグループリフレクション、そして(4) 全体のまとめ、に大別し、分析内容を紹介する。

### (1) マインドマップとスキットに関連する分析

マインドマップの創作者であるブザンは著書の中で、同じレベルの教育を受けた人たちであっても、一つの中心テーマに対して重なる単語を連想する場合は少なく、それほど個々人の想像力は無限で個性的であると語っている。本稿の研究対象者から得たマインドマップの結果からも、献身というテーマから連想された多種多様な概念が観察されている。以下の図6は、各グループのマインドマップで使われた単語、および語句を、上位概念（「献身」という言葉から直接連想されたもの）と下位概念（「献身」という言葉から間接的に連想されたもの）に整理したものである。言葉の後の数字は、言及回数を表している。

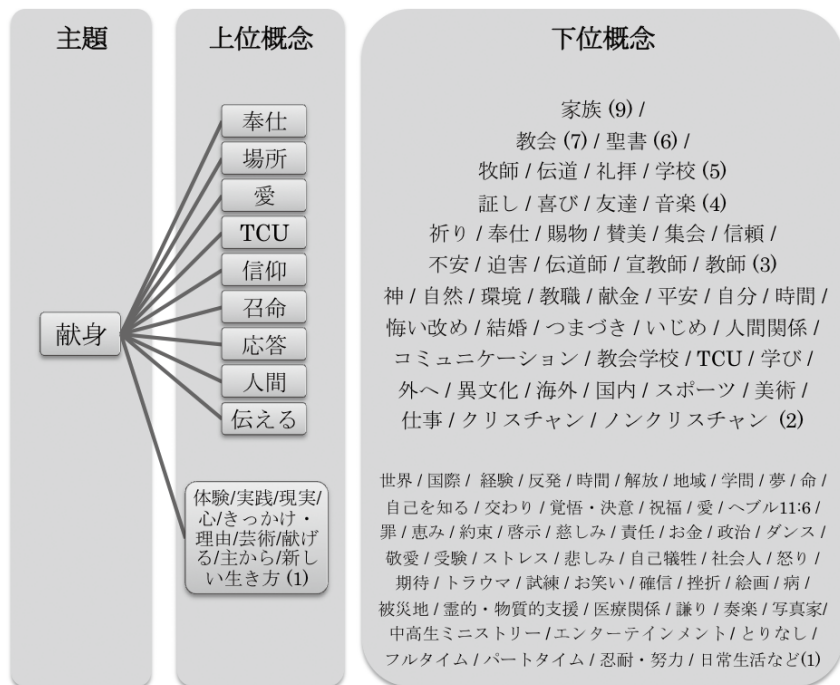


図6 5つのグループが作成したマインドマップの概念と語句別言及回数

図6で上位概念に属する9つの単語は、そこから派生した下位概念の中で重複して現れる場合もあった。語句の集計は、語形は違っても内包している意味が互いに似ている（または従属する）類義語関係の単語である場合、同一の意味と判断した。たとえば、「家族」と「家庭」（ともに生活する社会的構成単位）、「親子」と「親」（血縁関係にある人々のこと）という単語をすべて類似した「家族」という意味で、また、「仕事」と「職業」（金銭を稼ぐために行う生活の中での主要な活動）という単語を「仕事」という類似した意味で使われたと判断し、同意単語として集計している。また1つのグループのマップの中で、同じ単語が重複して複数使われた場合は、該当単語の重要性が強調して現れているという点で、それぞれ個別に数えることとした。

各グループが作成したマインドマップの中で、最も多く使われた語句は「家族」（9回）という単語であった。そのことは、2つ目の課題であるスキットのストーリー

にも反映されていた。グループ④を除いた他の4つのグループのスキットにおいては、主人公の家族や家庭環境は、主人公の「献身」に関して決定的役割、または影響を与える存在として描かれていた。スキットの中で家族は主人公たちを励まし、導き、ある時は葛藤を起こす要素として登場する。学生個々人の経験談や、もっているイメージに基づいてマインドマップが作成されたことを考慮すると、学生たちの「献身」に対する概念形成において、彼らの家族や家庭環境が大きな部分を占めていることが伺えた。

家族の次に影響力を発揮すると考えられる存在は、教会の牧師であった。グループ①のスキット以外の全てのスキットには牧師が登場するが、マインドマップの中でも「牧師」という単語の使用回数は5回で、主要概念に属する語句である。スキットに登場する主人公たちはそれぞれ教会等の集会で牧師の説教を聞き、助言を求め、それらを通して「献身」を決心している。あるグループのスキットの中では、牧師の説教が無音で表現されたり、「たまに牧師の言葉が理解できない時があるが」という台詞を入れたり、助言を求める主人公に牧師が「決まり切った言い方」で対応したりするといった皮肉を込めた描写もあるが、それにもかかわらず主人公たちは大切な場面で牧師を訪ねている。

学生たちはマインドマップを作成しながら、今まで家庭や教会、家族や牧師を通して学んだ「献身」という概念をグループメンバーと共に繙いていくなかで、自分や友人の経験談、また今まで見聞きした物語をスキット創作の（聖書以外の）参考資料として用いた。ブザンによれば、グループでマインドマップを作成しながら「グループ記憶」を形成していくプロセスの中で、メンバー間の連想結合が促進され、またそこにユーモアの要素が加わることによって創意的思考がさらに促されるという<sup>17</sup>。ユーモアは、ほとんどのスキットの中に見られた要素であり、グループワークを楽しみながらも、真剣に「献身」の理解を深めようとする学生の姿を確認することができた。

以下の表1は各グループのスキットとマインドマップとの関係、スキット創作に用いた参考資料およびリフレクションの中で学生が説明した内容を図表化したものである。

---

17 ブザン・ブザン、前掲書、200頁

表1 グループ発表におけるマインドマップの活用と参考資料

	マインドマップの活用 (スキット)	参考資料 (スキット)	参考資料 (ティーチング)
グループ1	写真家という単語から主人公のキャラクターを設定し、物語の骨組みを作った	自分たちの献身に関するイメージ	聖書、実体験
グループ2	献身することになったきっかけと、それぞれの賜物、場所に関する枝を活用した	聖書（マタイ16：24）	聖書、アニメーション
グループ3	出てきた現実と信仰の関係と献身のイメージをスキットの中で散りばめた	聖書、カテキズム、メンバーの修道院体験談	聖書、自分の体験、友人の証し
グループ4	皆の関心があった部分を取り上げて、その観点から一番伝えたい物語を作った	特になし	特になし
グループ5	体験、心、実践の部分をそのまま登場人物の過去、現在、未来に活かした	グループメンバーの体験談、証し	メンバーの体験談、歌、テレビ番組

学生たちはマインドマップの作成を通して、個人リフレクションペーパーの質問2の中で、次のような発見があったと答えた。

「頭の中が整理されて、少しずつ明瞭になっていった」

「頭の中だけで考えるより、書いてアウトプットした方が沢山のアイディアが湧いてくる」

「図にすることで、つながりが見えてきて、面白いと思った」

「献身の意味の多様性がリアルに出てきて、その世界が広がり、明瞭になった」

「自分が考えていた献身というものが、狭く、抽象的であることに気付いた」

「マインドマップを作るうちに、どんどん献身の思いを広げ、深めることができた」

「献身に至るまでの過程、きっかけなど、新しく考えることができた」

「自分の献身へのイメージがだいぶ変わった」

「様々な枝、献身のあり方があることを再確認し、その素晴らしさと美しさを感じた」

マインドマップは連想の対象になっていない情報（ブザンのいう「直線的情報」）から主要な概念を取り上げ、組織化することに役に立つとブザンは主張する。すなわち、講義や本、メディアといった外的環境から得られた情報と、意思決定、分析

的思考、創意的思考のような内的環境から得た情報の融合を促すような、主題に対する分析を可能にし、その過程を通して概念の明瞭化が起こるのである<sup>18</sup>。それは1章で取り扱った高橋の研究を通して確認されていることがらでもある<sup>19</sup>。上記のような感想は、今まで教会や家庭といった外的環境から得た「献身」に関する抽象的概念が、マインドマップを通して個々の内的情報と結合することでより明確になるプロセスを物語ると分析することができるだろう。

## (2) スキットとグループリフレクションに関する分析

以下の表2は、発表された各グループのスキット内容とグループリフレクションの結果から、そこに表れた概念と、マインドマップの主要語句の関連性をまとめたものである。

表2 スキットに表れた献身の概念とマインドマップ主要語句との関連

	スキットの内容	内容に表れた 献身の概念	マインドマップ 主要語句
グループ1	写真家になることと献身への思いの間で悩む女子高生の物語	牧師になること、時間や才能を神のために使うこと	牧師 (5回)、賜物 (3回)、時間 (2回)
グループ2	それぞれ異なる信仰の背景を持つ4人の高校生の友情と献身の思いに関する物語	伝道すること、賛美をすること、人を助けること、お金をしないこと	伝道 (5回)、賛美 (3回)、奉仕 (3回)
グループ3	カトリック信徒だった高校生がプロテスタント信徒になって献身を決心するまでの物語	神を学ぶこと、賜物を発見すること、生涯を通じて神に従っていくこと	聖書 (6回)、賜物 (3回)、神 (2回)、学び (2回)
グループ4	献身の思いはあるが、教会奉仕と仕事との両立のことで悩む会社員の物語	牧師になること、神の前で生活のすべてをしていくこと	牧師 (5回)、奉仕 (3回)、神 (2回)、日常生活 (1回)
グループ5	大学で神学を学ぶことになるまでのストーリーを語り合う二人の大学生の物語	牧師になること、人を助けること、自分がやりたいこと	牧師 (5回)、奉仕 (3回)、自分 (2回)

18 ブザン・ブザン、前掲書、171-172頁

19 高橋、前掲書、16-17頁

各グループのスキット内容を見ると、3つのグループが高校生を、1つのグループが大学生を、1つのグループが会社員を主人公にする物語を創作している。また大学生を主人公にしたグループの物語も、大学に入学する前の出来事を回想する形式で物語を描いている。多くの学生は、マインドマップ作成によって浮かび上がった家族や教会、家族や牧師との関係性等を通し、「献身」に関する概念が生成された時点であろう高校生時代や、大学に入学する前の時期を中心にストーリーを創作したのである。また表2を見ると、マインドマップの主要な語句が、各グループのスキットの中で「献身」に関連する概念として多く使われていることが分かる。スキットの内容や、そこに表れた献身に関する主要な概念語句から、「献身」と「牧師になること」や「人を助けること」が非常に近い関係として認識されていることも分かる。

一方で、以下のような特徴的な出来事も観察された。それは、グループで作成したマインドマップを発表する際、多くの学生が献身を、単に「牧師」になることとして規定することに対してさまざまな疑問を投げかけたことである。たとえば「フルタイム献身者」「パートタイム献身者」という表現の問題点が指摘されるなかで、「果たしてフルタイムの牧師は24時間ずっと献身していると言えるのか」といった問いかけ等である。しかし、スキットを作成する前の段階で、「献身」イコール「牧師」という図式に対する反感ともいべき想いを抱きながらも、ほとんどのスキットの中では、「献身」と「牧師になること」が近い関係で描かれていた。それは、学生の多くが、「献身」イコール「牧師」という既存概念に対して大きな疑問を抱きながらも、その疑問の答えとなるような「別の形の献身」をまだ見つけ出せていないという、彼らの中の「葛藤」の表れと言えるのかもしれない。

### (3) ティーチングとグループリフレクションに関する分析

3つ目の課題であるティーチングは、クリスチャンのユースキャンプで献身について語るという設定の下で、自由な形式で各グループの発表が行われた。以下の表3は、発表された各グループのティーチング内容とグループリフレクションの結果をもとに、発表の中で語られた文章や説明された内容をまとめたものである。

ここで注目されるべき最も大きな変化は、スキットの中心に位置していた「家族」「牧師」「奉仕」といった外的要因が、ティーチングにおいては、「神と自分との関係性」や「日常生活での自分のあり方」といった内的要因に変わっていったことであろう。そこに学生の「献身」理解に起こった明らかな変化を見ることができる。マインド



表3 ティーチングに表れた献身の概念とマインドマップ主要語句との関連

	ティーチングの内容	内容に表れた 献身の概念	マインドマップ 主要語句
グループ1	スキットとディスカッションを通して信仰者の異性交際、美容整形、飲酒問題を扱った講演	清さを神に捧げること (ローマ12:1、ガラテヤ5:16-25、アモス5:21-23)	聖書(6回)、神(2回)、日常生活(1回)
グループ2	アニメーション「アンパンマン」の内容や主題歌の歌詞を通して、献身の意味を考える講演	自分を捨て、自分の十字架を背負って神の栄光を現すこと(イザヤ43:7、第一コリント10:31、マタイ16:24)	聖書(6回)、神(2回)、自分(2回)
グループ3	高校生3人の物語を通して日常と信仰とのバランスを説明したショートムービー	特別な行為ではなく、多様な形や方法を通して実現していくこと	礼拝(5回)、環境(2回)、日常生活(1回)
グループ4	忙しい日常の中で看過しがちな信仰生活の姿勢について考えるショートムービー	日常の中で、神との関係を忘れないこと	神(2回)、日常生活(1回)
グループ5	献身を決める高校生の姿からユースミニストリーでの献身を考えるトーク番組	日々の中で、神から与えられた賜物を活かして、誠実に生きること	賜物(3回)、神(2回)、日常生活(1回)

マップを作成する中で、1つのグループが1回だけ言及した「日常生活」という下位概念が、スキットとティーチングを作るプロセスで、すべてのグループにおいて新しく中心的イメージとして浮かび上がっている。彼らの「献身」理解は、「外に目を向ける存在」「何かをすべき存在」から、「内側に目を向ける存在」「こうあるべき存在」に、言い換えれば、「献身」の本質が、「doing」から「being」に変化したといえることができるかもしれない。学生たちはスキットとティーチングを創作する過程で、自分たちのマインドマップを繰り返し確認し、考察しながら、そこに欠如している部分を発見し、新しい枝を増やしていったのである。以下はそれを物語るリフレクションである。

「マインドマップで献身から色々言葉をのばして、生活全体をカバーした感じで面白かった」

「自分が考えてもなかったようなことが、献身につながっていたことを発見した」

「献身としての正しいあり方に着目していたので、前回とは違う方面から考えられた」

「他人の立場からの献身を考える中で、色んな献身があるのだと気付かされた」

「何をするにもただ神の栄光を現すためにしなさい（第一コリント 10:31）の意味が深まった気がする」

「一人で考える方が楽な面もあるけど、グループだとさらに幅が広がる」

「独りよがりな考え方をしていたんだなと思わされた」

「献身というのは、神を中心に歩むこと、それを実践することという二つのことを学ばされた」

「自分たちで作り上げるというのは、大変で難しいのと同時に、『自由』だということ。それは自分たち独自の見せ方、表現を通して自らを『証』するようなものであることを感じた」

また、グループワークを遂行する中で学生たちはメンバーとの間でさまざまな葛藤を経験し、ともに問題を解決していくことを通して、自分と他者への理解度が深化し、連帯感が深まることを感じたと答えた。宗教教育におけるナラティブ・メソッド（本稿ではスキットとティーチング）の活用が、他者への理解を深め、コミュニケーションスキルを向上させ、共同体意識の成長をもたらすということは、他の同様な研究を通して明らかである<sup>20</sup>。学習者は協働作業を通して、自分の思考を客観視することを学び、そのうえで他者の思考も尊重して受容する包容力を身につけるに至ったと考えられる。以下はその例とも言えるリフレクションである。

「みんな日に日に変えられていくのが見えて、それもそれで楽しかった」

「みんな真剣に考えていることを感じて、とてもよかった」

「それぞれの世界観が個性的に出ていて感じた」

「みんなで何かを作り上げることが楽しかった」

「チームメイトの意外な面や賜物を発見することができた」

「みんなそれぞれ賜物があることが、今までのグループ発表を通して知ることができた」

「だんだんグループの絆が深まった」

#### (4) 分析のまとめ

収集されたデータの、グラウンデッド・セオリーを用いた分析を通して顕著に浮

---

20 岡村直樹・徐有珍「ナラティブ・メソッドを用いたアクティブ・ラーニングーボンヘッファーの生涯を題材にした宗教倫理教育の実践」（『キリスト教教育論集』第23号、日本キリスト教教育学会、2015年、39-54頁）

かび上がってきたことがらは、マインドマップとナラティブ・セオリーのもつ宗教教育的価値である。まず指摘されるべきは、宗教教育におけるマインドマップの活用は、個々の学習者の中に、宗教的概念に対する新たな気付きをもたらすということである。プレゼンテーションやリフレクションの中には、今まで日常的に用いていた言葉の意味が実は予想以上の広がりをもつこと、当たり前のように受け入れてきた概念がより深い考察を必要とすることへの言及が多くあった。またその言葉が、自分にとって重要な意味をもつ言葉であった場合には、自分自身の人生観の再考を迫られたりといった気付きが繰り返し語られていた。

そして学生の感想の中には同様の気付きが、マインドマップとナラティブ・セオリーを用いたグループワークから起こったことも記録されている。マインドマップを共同で作成するプロセスや、ナラティブのプレゼンテーションを準備するプロセスの中で、学習者は、他の学習者と向き合い、互いの考えをぶつけ合い、時には強い自己主張で、時には妥協することで、総意を形成することが迫られた。その中で多くの学生は、自らが信じて疑うことのなかった宗教概念が、実は自分だけの特有の信念であったことに気付かされたり、また自分が置かれている信仰共同体の中ですら、多様な価値観が存在することを発見したりといったことが、やはりプレゼンテーションやリフレクションの中で繰り返し語られている。教師に教えられてではなく、自らが生きるコンテキストの中から、学習者が自分自身と、また他者と向き合いつつ、主体的な学習の営みの中でさまざまな結論に達したということは、特筆すべきことであろう。これらの変化は、マインドマップとナラティブ・セオリーの、ペダゴジーとしての価値を力強く物語るものであると言えるだろう。

## 第5章 課題と提言

本稿は質的研究として、非常に限られた地域で、限られた人数を対象に行っているため、研究の結果を直ちに広く一般化することはできないであろう。本稿では、東京基督教大学の学部1年生を研究対象としたが、他学年の学生が選ばれた場合や、他のキリスト教主義大学において研究がなされた場合、違った結果が浮かび上がる可能性があることは否定できない。さらに時の流れと共に、研究対象者もまた研究対象者をとりまく社会も変化することから、研究結果の実際の有効期間もさまざまである。しかし質的研究の方法は、量的研究が取り組むことを躊躇する領域に足を踏み入れ、現場に根ざした質的なデータを重視し、リアリティをもってそれらを詳

細に記述することを通して、現象の本質を追い求めることをその本分としている。質的研究の結果は、量的研究のそれと対比させ、二項対立の図式の中でその優劣が競われるべきものではなく、研究の目的を果たすためにあらゆるデータを活用するという方法論の中で、説得力をもつ実践的な取り組みの手掛かりとして活用されるべきものであろう<sup>21</sup>。また本稿では収集されたデータは、可能な限り書き記した。それは質的研究において、観察者が異なる場合、全く同じデータから、違う結論が導き出される可能性があることを考慮しつつ、この研究を目にする者を、新たな観察者として招待するためである。

さて、本稿の結果から筆者は、教育の現場におけるマインドマップとナラティブ・メソッドの活用が、一般教育だけではなく、宗教教育においても非常に肯定的な効果をもたらすことを確認することができたと感じている。研究の初めの段階でマインドマップを通して明らかになった学生自身の「献身」に対する理解は、特定の「職種」または「役割」を中心に認識されていた。しかし学びを継続する中で、学生たちはマインドマップに表れた自らの献身観の課題を発見し、それを反省し、その状況を克服するための考察を重ねていった。また理解や価値観の多様性を受け入れるといった有意義な「変化」も導き出したのである。

本稿は、約1ヶ月という短い期間で実施したが、学生によるプレゼンテーションやリフレクションの中から、彼らの中に起こったさまざまな変化やそのプロセスの一端を発見することができた。繰り返しになるが、今回のような試みが、すべての学習者に同様な教育効果をもたらすものではない。また、グループメンバー内の議論の中で起こる意見の不一致等によって人間関係の難しさを感じ、心理的萎縮を経験したという率直なりフレクションも見られ、この方法が、グループワークに困難を覚える学習者に対する配慮や工夫を必要とすることを示している。言い方を変えれば、グループワークを多用する学習においては、グループ内の関係性のダイナミクスを良好に保つ責任が、教育する側にも課せられているということである。しかしそのような課題を抱えつつも、マインドマップとナラティブ・メソッドの活用は、キリスト教教育における学習者の学びの主体性を引き出し、連続性 (continuity) と変化 (change)、伝統 (tradition) と改革 (reformation) という「方向性の対立」の課題を克服する可能性をもつペダゴジーとして有効であると考えられる。今

21 岡村直樹「クリスチャンユースのラポール形成に関する質的研究」(『キリストと世界』第22号、東京基督教大学、2012年、84頁)。

後、宗教教育の現場において積極的に用いられ、試されていくべきであると筆者は考える。

近年、日本の多くのキリスト教教育者の間で、キリスト教教育の現状に関して、疲労や限界を訴える声が高まっている<sup>22</sup>。それらはキリスト教教育がその目標とする到達点に近付けず（または見付けられず）、その外側に留まり続けていることに対する不安や葛藤を反映しているのかもしれない。20世紀前半、アメリカの進歩的キリスト教教育者であったジョージ・アルバート・コウ（George Albert Coe 1862-1951）は1929年に投げかけた「キリスト教教育の目的は、宗教を伝授することなのか、新しい世界を創造することなのか」という重大な問いかけを行った。その答えは未だに見出されず、問いかけだけが、今日の教会やキリスト教学校などの宗教教育の現場に浮遊しているようにも思われる。キリスト教教育者は、教育の中で当たり前のように用いられているさまざまな、曖昧模煖とした概念の存在を認め、学習者にそれを問いとして投げかけつつ、彼らにそれを統合する機会を提供しなければならない。その時、学習者は探究心と創意力を発揮し、自らの成長をはかっていくのだ。必要なのは、教育者が見つけた答えを学習者に提供することではなく、学習者自らが答えを見つける手助けをする教育者になることなのであろう。筆者自身も、学習者に学びの自由と喜びをもたらす宗教教育を目指しつつ、自らも学習者として彼らと共に成長し変化し続ける努力を重ねていきたい。

---

22 日本キリスト教教育学会 第23回学会大会シンポジウムテーマ「キリスト教教育のPerspective」(『キリスト教教育論集』第20号、日本キリスト教教育学会、2012年、101頁)